

無, Lp (a), Fibrinogen 及び Plasminogen 値, Aspirin 及び warfarin の使用状況. 【結果】LAT は24例 (27%) にみられ, 全てが左心耳血栓であった. 単変量解析では塞栓症の既往 (54% vs 15%, $p < 0.002$), Lp (a) 値 (39.0 ± 28.0 vs 18.9 ± 15.1 mg/dl, $p < 0.001$), 左房径 (5.5 ± 1.0 vs 4.7 ± 0.6 cm, $p < 0.001$), SEC (67% vs 38%, $p < 0.05$), warfarin の未使用 (4% vs 32%, $p < 0.01$) が LAT に関係していた. 多変量解析では warfarin の未使用 ($p < 0.0001$), 左房径 ($p < 0.001$), Lp (a) 値 ($p < 0.01$), 塞栓症の既往 ($p < 0.02$) が独立した予測因子であった. 【総括】慢性 AF の LAT の危険因子は従来から言われている warfarin の未使用, 左房径, 塞栓症の既往に加えて, Lp (a) は新しい独立した危険因子である.

女性16例. 診断: 不安定狭心症13例, 急性心筋梗塞20例, 冠動脈病変: 1枝病変15例 (45%), 多枝病変18例 (55%) で内5例 (12%) で左主幹部病変を伴った. 陳旧性心筋梗塞は8例 (24%) に合併が認められた. 【治療】不安定狭心症: PTCA 単独 (POBA) 12例 (92%), 緊急 STENT 1例 (8%). IABP 使用1例 (8%). 急性心筋梗塞: direct PTCA 17例 (85%), PTCA+rescue PTCA 3例 (15%). 【結果および転帰】30例 (91%) は軽快退院し, 入院期間11~67日, 平均30日, 全例当科 (11例) または他院外来 (19例) へ紹介された. 死亡は3例 (9%) で全例来院時 shock 状態であった. 【考案】80歳代では他の年代と異なる適応や, 様々な施行上の注意点 (当日呈示) があるが, 救命および QOL の改善 (発症以前の家庭生活が目標) に有効と考えられた.

5) 多彩な症状を示した感染性心内膜炎 (IE) の1例

小山 仙・河内 文女 (信楽園病院)
横山 明裕・筒井 牧子 (循環器内科)

(症例) 33歳男性. (主訴) 頭痛, 腹痛. (臨床経過) 1995年12月中旬より40度の発熱が出現した. 翌年2月14日より頭痛を訴え, 近医受診するも軽快せず1996年2月22日当院入院した. 心エコーで僧帽弁前尖の肥厚と僧帽弁逆流3度を認めた. 血液培養にて Strep. viridans が検出され IE を疑い抗生剤治療を開始した. 頭部 MRI では上側頭回に動脈瘤を疑う所見を認めた. 頭痛の緩和時より左側腹部痛を訴え, 3月19日腹部エコーにて脾動脈瘤を認めた. 経過観察にて内部は器質化し血流は消失した. また腹痛も消失した. 4月8日 CRP は陰性化し, 現在再発の兆候はない. IE に伴う脾動脈瘤は比較的稀な症例と考えられ報告した.

2) 高齢者虚血性心疾患に対するカテーテル治療

—初期成績および遠隔期成績—

小田 弘隆・三井田 努
伊藤 英一・戸枝 哲郎 (新潟市民病院)
樋熊 紀雄・中川 巖 (循環器科)

【目的】虚血性心疾患を有する75歳以上の高齢者に対するカテーテル冠動脈治療の初期および遠隔期成績を検討した. 【対象および方法】待期的なカテーテル冠動脈治療を行った75歳以上112例, 75歳未満136例を早期成績の対象とした. 遠隔期予後は, 調査可能であった75歳以上97例 (87%), 75歳未満112例 (82%) を対象とした. 初期成功率および遠隔期予後とその関係因子について検討した. 【結果】カテーテル冠動脈治療の患者成功率は75歳未満94%, 75歳以上93%で, 重大合併症は75歳未満で心筋梗塞2例, 75歳以上で死亡1例, 心筋梗塞3例であった. 遠隔期予後の心臓死は75歳未満2%, 75歳以上8%であった ($p = NS$). 再血行再建術は75歳未満27%, 75歳以上25%であった. 75歳以上の生存率解析 (Kaplan-Meier 法) において, 性別, 完全血行再建の有無, 残存する慢性完全閉塞病変の有無では有意差を認めなかったが, 術前有病変枝数で3枝病変は1枝および2枝病変に比し有意に生存率を低下させた. 75歳以上において, 心事故群は生存群に比し, 術前左室駆出率は有意に低値で, 有意に多枝病変であった. 多変量解析 (over all) において心臓死関係因子は完全血行再建の有無, 心事故関係因子は高血圧であり, 高齢は関与していなかった. 【結語】75歳以上に対するカテーテル冠動脈治療の予後を検討した. 1) 患者成功率および合併症頻度は75歳未

II. テーマ演題「高齢者循環器疾患の治療」

1) “80歳代の虚血性心疾患に対する Coronary Intervention”

大塚 英明・吉田 裕志
本間 元・青木 芳則 (新潟こばり病院)
宮北 靖・大島 満 (循環器内科)

【対象】1985年9月15日~1996年8月31日当科においてカテーテル治療を行った初回治療時年齢80歳以上の症例33例. 年齢: 80~87歳, 平均83歳. 性別: 男性17例,

満群と差を認めなかった。2) 心事故(心臓死, 心筋梗塞, 再血行再建術)発生は両群に差を認めなかった。3) 長期予後は75歳未満群に比し, 有意に低下したが, 心臓死に差を認めなかった。4) 多枝病変, 左室駆出率低下が心臓死に関与していた。

3) 高齢化したペースメーカー治療

船崎 俊一・田辺 靖貴 (済生会新潟第二
田村 真 (病院循環器科)
田中 吉明 (済生会三条病院)
斉藤 玲子・鈴木 啓介
佐藤 匡・松原 琢 (新潟大学第一内科)

平成3年7月1日開院より平成8年9月17日までの間に永久ペースメーカー手術を156例(VVI型51例, DDD型95例, AAI型10例; 2例はAAIT)に施行した。患者背景: 男性60例, 女性97例, 年齢は17歳—91歳で新規141例, 交換15例であった。基礎疾患では心房細動18例, 洞不全症候群67例(Ⅲ型13例), 房室ブロック67例; 完全房室ブロック38例, 高度房室ブロック29例, その他QT延長症候群が4例あり内2例はTorsade de pointesを認めた。全症例の内70歳台が最も多く68例で, 次の60歳台37例, 80歳台29例と症例の高齢化が進んでいることがわかった。このうち初回植え込み症例が70歳台57例(83.8%), 80歳台28例(96.6%), 90歳台(100%)と高齢化していることが示された。電池寿命が8年前後であることから電池交換術を受ける時点での予想年齢が著しく高齢となることが予想される。高齢化に伴う手術に関連した問題点として術中, 術後の腰痛, 不穏行動と術後の肩関節痛が挙げられる。手術に要した平均時間はDDD型; 新規55.2分, 交換36.4分, VVI型; 新規37.0分, 交換27.8分, AAI型新規35.1分と短かったが手術中に3例が腰痛, 不穏行動のため突然半座位となり鎮痛, 鎮静などの処置を要した。当院では手術後3時間で30度までのベッド挙上を可とし, 翌日は歩行としている。平成7年10月以降は4日目からは肩のすくめ運動を行わせた結果69.5%の肩関節痛発現が14.8%に減少した。高齢者ではICU症候群などの不穏行動が出現することがあり手術時間の短縮, 早期安静解除が重要と思われた。また手術側の肩関節痛が出現しやすいことから関節の挙上運動は重要と思われた。

4) 多彩な合併症を伴った高齢者褐色細胞腫の1例

政二 文明・島野 達郎 (桑名病院循環器科)
川崎 隆 (新潟市民病院
泌尿器科)

症例は79歳男性。前壁中隔梗塞の診断で当科入院。発作1週間前から発作性の冷汗あり。Subsetは1で, ECG変化に比較して心筋逸脱酵素の上昇は軽く, UCG上の心室中隔の壁運動の低下も速やかに改善した。入院後第4病日まで, 発作性の低血圧が頻回にあり。その後も, 起立時に低血圧発作を示すものの高血圧発作は認めず。退院5日後, 胸膜炎で再入院。この際300mmHgに及ぶ高血圧発作を示し, VMA, メタネフリン高値。CTにて右副腎に腫瘍を認め, 同側副腎静脈血中のカテコラミン上昇から褐色細胞腫と診断。同側腎上極に異常陰影あり, 生検にて腎梗塞の診断。術前の血管造影では, 冠動脈, 腎動脈ともに梗塞を説明する動脈病変は認めなかった。本例は以下の点で興味深いと思われた。(1) 心筋梗塞の急性期には褐色細胞腫による低血圧発作のみで, 高血圧発作は顕著でなかった。(2) 心筋梗塞, 腎梗塞, 胸膜炎と多彩な合併症を伴った。(3) 心筋梗塞, 腎梗塞は血管攣縮による可能性が疑われた。

5) 超高齢者(80才以上)に対するCABG手術

中沢 聡・小熊 文昭
保坂 淳・男沢 拓 (立川総合病院
近藤 典子・入沢 敬夫 (循環器センター)
春谷 重孝 (心臓血管外科)

高齢者のCABG手術が増加しているが, 80才以上の超高齢者での手術適応決定には慎重を要する。当科では1993年以降に80歳以上のCABG手術を9例経験しており, 今回その臨床成績について検討した。

9例の内訳は, 男4例, 女5例, 年齢は80才~84才であった。待機手術が8例, 緊急手術は1例のみで, 手術結果では在院死亡はなく, 現在も全例生存していた。

バイパス本数は2本2例, 3本6例, 4本1例で, 内胸動脈グラフトは6例に使用されており, 1例には両側内胸動脈グラフトが行われていた。術後経過ではIABPの使用は緊急手術の1例のみであった。ICU滞在日数は7例が2日以内で, 残り2例も3日であった。PMIは2例に発生し, 縦隔炎, ICU症候群をそれぞれ1例に認めた。無輸血手術は1例のみであったが, 止血のために再開胸を要した症例はなかった。